無政府主義の大成

エリゼ・ルクリュ

物

産主義の發案者、大先達として世界の進步的青年の崇拜的敬慕を一身に集め、人文地理學または 社會地理學に於ては古今獨歩の碩學と稱せられ、或る時は銃を執つてバリケードに立ち、或る時 峻嶺に、或はピレネーの幽谷に、或はエトナ、ベスピヤスの噴火口に、踏査探險の壯攀を敢行 さに鍬鋤の激勢に堪え、或る時はペンとノートとを懐にして野に臥し山に寢ね、或はアルプスの は祖國亡命に際し、理想鄕建設の雄闘を抱いて、アイルランドに、北米に、南米に刻苦辛酸、具 る。十九世紀に於ける人類解放の多くの革命運動に關與して絕倫の精力を發揮し、 會議に於て終身遠島の刑に處せられ、歐米學界人をして一大抗議を佛國政府に呈せしめ、バクニ エリゼ・ルクリュ (Elisêe Reclus) は第十九世紀の世界が生んだ最大人物の一人だと言われ 或る時は北米に於ける黑奴制の暴狀に憤激し、一大論文を『兩世界評論』に掲げて世論を喚 大統領リンカーンをして感激措く能わざらしめ、或る時はパリ・コンミュンに對する軍法 殊に無政府共

る態度を聞いて次の如く書き送つた。 同志の如く發砲したであろう」と云い放つた。このコムミュンに國立圖書館管理者となつた兄の エリイは、弟達とともに出陣したが、コムミュン軍の瓦解と同時に脱走し、エリゼの法廷に於け

「ファンニイ(エリゼの妻君……石川)の二語、ただの二語によつて、君が流刑に處せられたこ

ることはできたかも知れないが、君を挫折せしめることはできなかつた。君はたしかに良心そ のものだ。本當に、私は君に對して不滿を持たない。立派なエリゼ!……」 の世界を睥睨して、君は常に之に真正面から立ち向つた。而もなお彼等は、君を些か痛めつけ 等は君を汚すことも、貶すことも、できなかつた。醜汚、陋劣な行動を以て穢されている彼等 中に於て、また流刑に遭遇して、何時も斷乎たる威嚴を保ち、正直で、誠實で、義勇であつ 、「わが愛する友よ、これは君の生涯にとつて重大な一時機だ。君はフラシスの面前に於て、 た。君は常に平靜に、且つ思う存分に行動した。フランス社會の地獄幽囚七ケ月を經ても、彼 人の男子だという證言を、軍法會議によつて與えられたのだ。君は銃殺の前に立ちて、

「實際に君は、あの空威張りする帯劍の卑劣漢ともに對して厭惡の苦笑を浴せ得るのだ。あの

者を壓殺し、勞働者を鏖殺し、その血を以て自分達の汚點を洗滌しようとしたのだ……」 軍人どもは、 わが不幸な哀れむべきフランスに、歴史上最も卑劣な打撃を加えた後、共和主義

輩は君を流刑にする、 マンとを守護した。そしてあのサン・シリヤンやフィガロチェ(軍人や保守政治家……石川)の徒 「結局、君は刑の宣告を受けた方が、吾々の道のために善かつたのだ……君は共和制とコムシ 君を知り、彼等を知るものにとつては、それで充分だ。」

が、しかし君は游泳の猛者だ、常に頭を大波浪の上に支えよ」 「君、何よりも大事なことは、不幸に打ち勝つことだ。 彼等は君を、 荒れ狂う 海中に投 じた

善良なエリゼ、では行けよ、また會う日まで」 事することだ。神経の流動に注意してくれ、君の健全な精神が、君の身體を健康に保つよう。 「四面の壁の中で、きつと君は體操をするだろう? それをより多くするように、より多く食

たん無期流刑の宣告を受けたのであるが、前述の如く世界的抗議が起つて、そのため減刑されて との兄弟愛は、世にも珍らしい美談として、今も廣く知人間に言い傳えられている。エリゼは一 らて十餘年の長い生涯の間、影の形に添うが如く、常二生活こともこして、このエリイニエリゼ これはエリゼの最も親しい同志にして、最も奪い兄から送られた訣別の手紙である。少年時か

ここにまた互に接近して居をトするに至つた。 十年間の追放となり、彼はスヰスを選んでこの國に亡命した。そしてエリイとエリゼの兄弟は、

×

堕落した人に對してさえ)に對する深愛に基くものである云々」 れは實に、彼等の自然に對する甚深な愛、殊に人間の天性、人間の威儼に對する愛、全人(最も 得よう。其の著書を讀み、其の言葉を聽いていると、自ら自分が善人になる様に感じられる。こ たのである。實際あの二人は、私の一生涯に曾て出會わない極端に優しすぎる人達だつたと言い 的な、些かの暴力行爲をもなし得ない様な此の二人に依つて無政府主義の教義は開發せしめられ である。かくの如く此の二人(ルクリュとクロポトキン)に依て、即ち最も平和的な、最も人道 の著作である「相互扶助論」に依つて最も該博に最も明瞭に無政府主義の原理が創定せられたの 悼講演中にとの『パンの略取』に言及して次の如く言つている『同著者(クロボトキン)の最近 れた。そしてエリゼは之に序文を書いた。ブルッセル新大學の總理ド・ブレフ博士はルクリュ追 八九二年、即ち大地理學第十九卷が出版された年に、クロポトキンの『パンの略取』が公けにさ 私はここに、エリゼ・ルクリュの人となりに就いて、なお少しく序述しなければならない。一

クリュを談る講演に於て次の如く言つている。 現代の桶仙人(ディオゲネス)として名聲の高いフランスの詩人アン・リネールはエリゼ・ル

世界の憎悪を感じた。恐らく、それが私を硬化し、そしてこの動揺が私の自然を打破したかも知 上、私は、私の周圍に殆ど不可通の厚い壁、即ちあのコムミュンとコムミュン一味とに對する全 する。「私の著作『或る山の歴史』の初めの部分には、或る缺點即ち眞實性の缺如が潜んでいは しないかと思う。私の記憶する限りに於ては、私はあの時(書いた時……石川) 獄中にいた、その 搖は、人間のはげしい愛である引力の中心に常に私を導く」と。 やがて彼は 不安になつて 説明 ある場合、それを無視すべく彼は餘りに眞摯、餘りに淸明である。しかし、彼は言う「種々な動 文句を發見したと告げた。エリゼ・ルクリュは之に抗議する。彼の感情に浮流狀態や動搖狀態の との間には、人間同志の間に於けると同様に、愛情を以てする以外に正義は生れない」と。 『一八八二年七月八日、彼はリシャール・ヘスに素晴らしい言葉を書き送つている「人間と動物 それから二十二年の後、老衰の彼の生涯の終りごろ、一通信者は彼の舊い著作中に人類輕蔑の

れない」

る。およそ彼の表現で、彼の心奥、 るのである。 彼は、 われわれが瞬間の眞實性と呼びたいところを、 彼の愛の放射から出ないものは、 彼は悉く切情を以て否定す 眞實性の缺 如と呼んでい

得る瞬間が存在しはしないか? たぐいなき特異な例だが! その努力と硬直とが、 ただわれわれの自然の冒された美だと言い

服せられた弱者を支え起し、彼の持つた乏しきを無一物の人々に分け與えたことを。 同僚の上に注ぐ優情と慈愛とを妨げない。あらゆる文献はわれわれに示す、彼はその力を以て屈 を打撃すればするほど自ら自負せねばならぬ」この専横に對する嫌惡の自負心は、決して不幸な あー起ち直る崇高さ! 私は前に、 彼が獄中から書いた言葉を引用した、曰く「私は運命が私

浮べ、明朗を齎らすのであつた。— 精神との滿全の健康を保持することを得た。彼は地下獄の底にまでも、 い。衝突の下に直立して、その愛を汎放するだけでは彼は滿足しない。彼はなおその上に心臓と 讃美すべき均衡、そして運動に於て、「輪廓を變ずる運動」に於て、生々した美を壘積する。 その防禦的態勢に於て、或は同志への援助に於て、 全く盡きるとい うことがな その唇に良識の逆の花を

×

なそれは寧ろ、蝶々や蜜蜂が花の色香に醉うて飛びまわるように、 ば滿足し得ない當時の若者たちの言動は素より彼の人格を傷けるには至らなかつたであろう。否 とに眩惑して、 のは彼が右手の爲すところを左手に知らしめぬという純愛の態度を非難した。何か他を非難せね ることは容易でない。或るものは彼が餘りに宗教的自肅の生活を一貫したことを非難し、或るも ルクリュ 知らず識らずそれにもつれ附くようなものであつたのである。 の研究又は讃仰の文献は數限りなく發見されるが、彼の人物の全貌を把握す 彼の人格の豊かな色彩と芳香

を以て私に書き送つたかを。 Reclus in Memoriam』(ジョゼフ・イシル編集發行)中に次の如く書いている。 一八八〇年頃ニュー・ヨークに彼を訪問したエリゼ・ルクリュの人格に就て、どんなに深い感激 「私は決して忘れることができない。私を最初に無政府主義に導いてくれたヨハン・モスト オーストリヤのピエール・ラムスはその先輩ョハン・モストの語を引いて『Elisée and Elie

たくものがある。いらだつて振り返えつて見ると、年をとつた、身のひくい一人の男が立つて 私(モスト)が『フライハ イト の編集室で、 ものを書こうとしている時、 突然私の肩をた

10

いる。而もその眼は親切と友愛とに輝やく特殊な光を放射している。

最も平凡な訪問者であるかのように、些かの勿體ぶりも高慢ぶりもなく、彼は言う『私はル

彼は極めて謙遜につけ加えた『御発なさい。お妨げして』

る。彼の眼は宇宙に透徹し、勞働者の解放のために闘うものは宇宙的威力と調和し一致すると いう感じを與える。エリゼ・ルクリュは僕が無政府主義者になつて以來の最大の皷吹者の一人 涯に於て最も幸福な最も輝やかしい瞬間の中に 加えられる。 彼の全人 格は激勵そのものであ との僕はエリゼ・ルクリュを抱擁したの彼とともにいた數時間の樂しさというものは、僕の生 僕は君に言うことができる、こうして妨げられたことは僕にとってまことに幸福であった

最も輝やける高尚な風貌を彼によつて添えられた。彼が『理想と青年』に就てのパンフレットに る。彼は人類知識の聖壇に淸明な思想と崇高な抱負との果實を供えた。無政府主義運動は、 表現せるものの何と美しいことか。エリゼ・ルクリュはその偉大な頭腦と剛强な天性とを以てわ モストが彼を通して感じたことは、すべて人類がエリゼ・ルクリュに負うところのものであ

れわれの全國際運動に則えた、その自由の理想の勝利に於ける久遠の若さ頑强さを。」

×

れんことをつ 異なるであろう。讀者希くは各自獨自の觀點を自覺しつつこの巨人の風姿に對峙しまた親接せら それ等の人々の所見を一々ここに紹介する譯には行かない。大山は登るに從つて姿を改め、 に從つて光彩を變更する。望見する者の脚地と識見とに從つてエリゼ・ルクリュの人物觀も自ら も各自が占める分野に於て第一線に立つた人々である。ルクリュを讃美し敬慕し、または之に私 エリゼ・ルクリュの人物を紹介すべく、私は方向の異つた三人の言葉を借用した。ド・グレフ アン・リネールも、ピエール・ラムスも、更にラムスが引用したヨハン・モストも、 知識人、文藝家、修道者は今全世界に數限りなく潜んで又は活躍している。私は、